

集歌

切

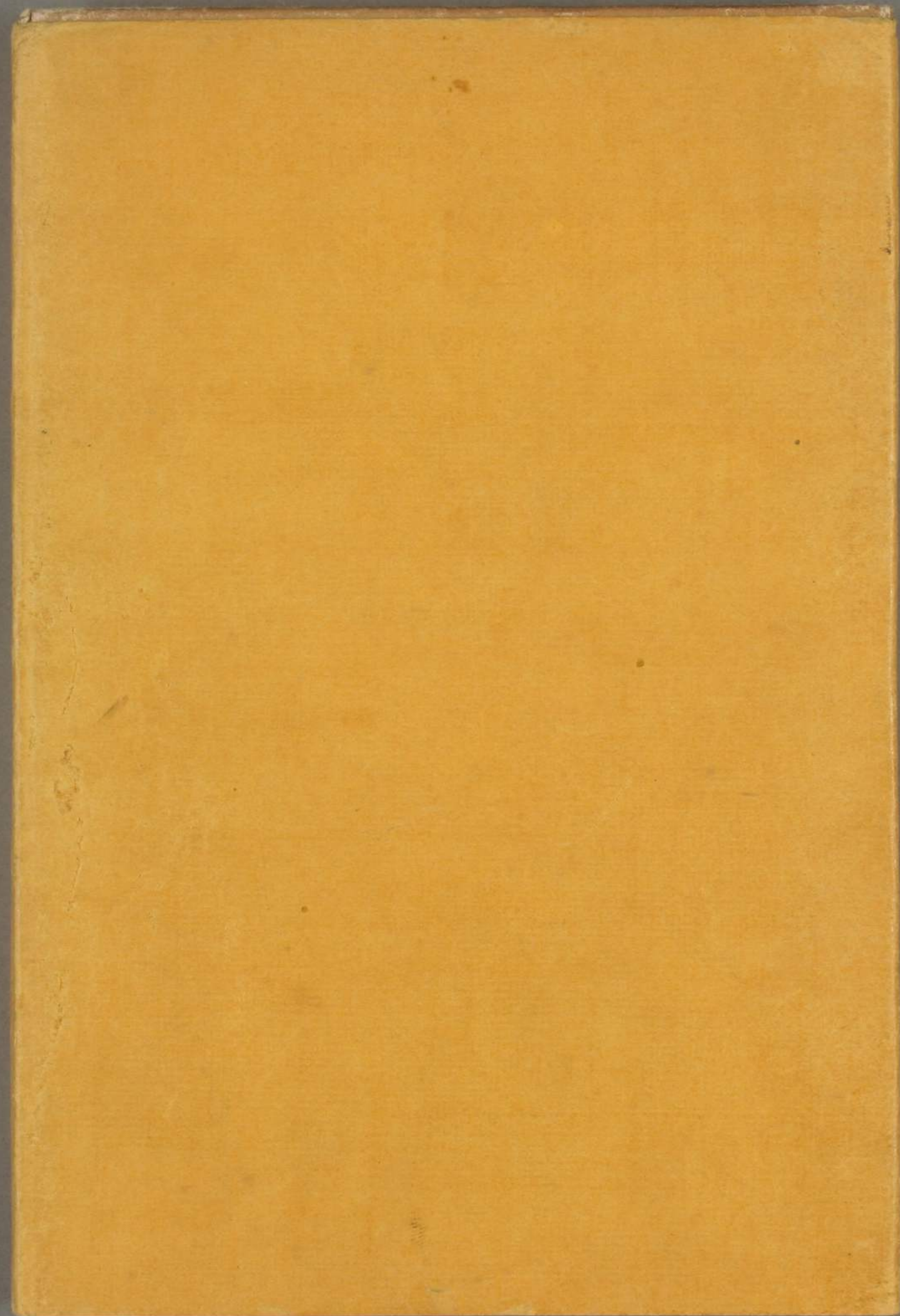
火



彦赤木島

歌集切火

島木赤彦著



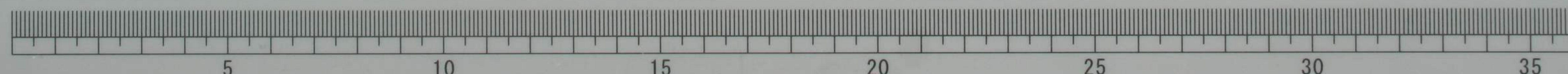
歌集切火

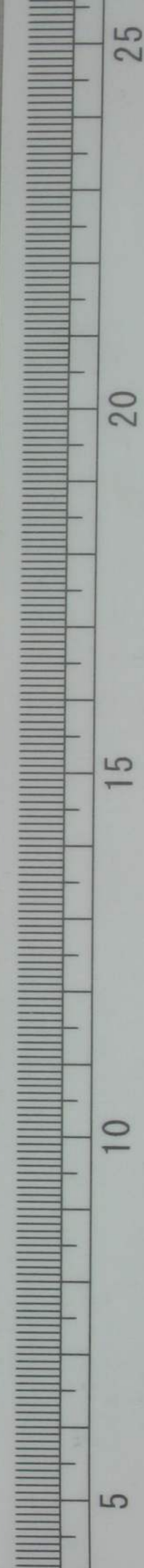
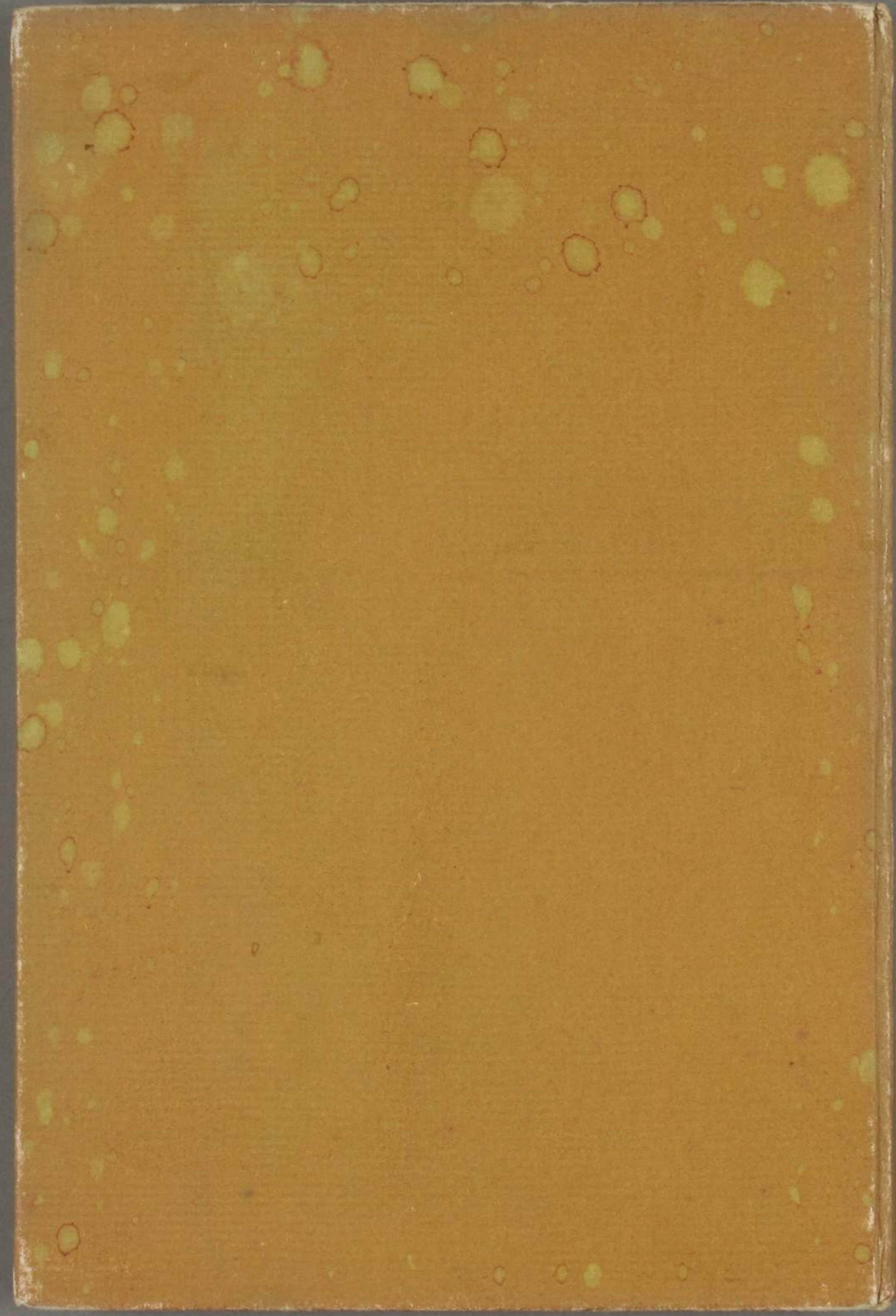
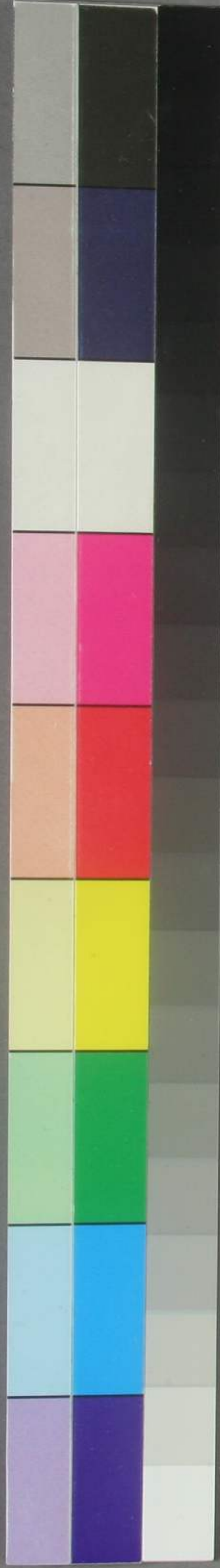
島木赤彦著

歌集
切火



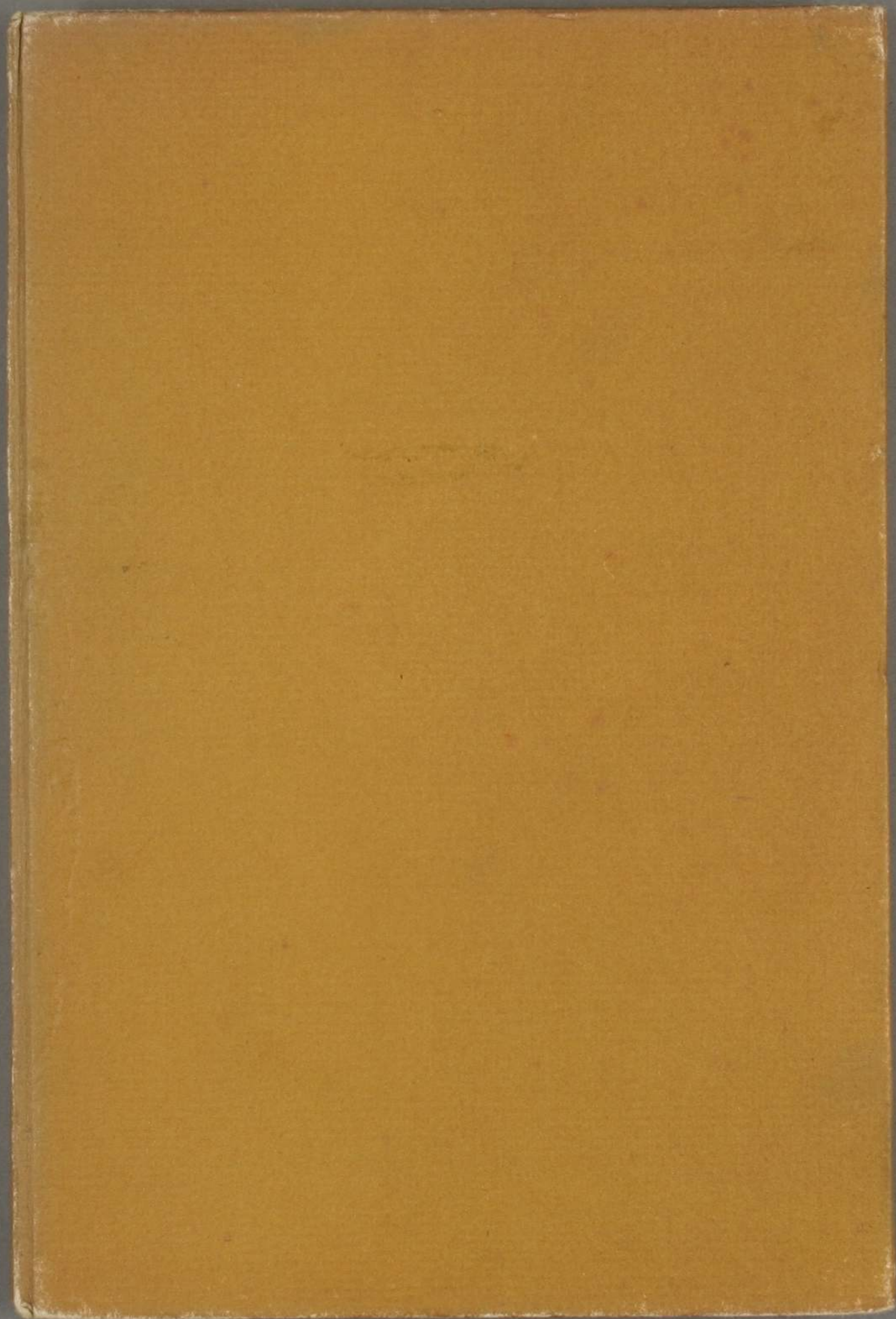
島木赤彦





歌集 國本

島本赤彦著



IWANAMI
BUCHHANDLUNG
TOKYO
店書波岩

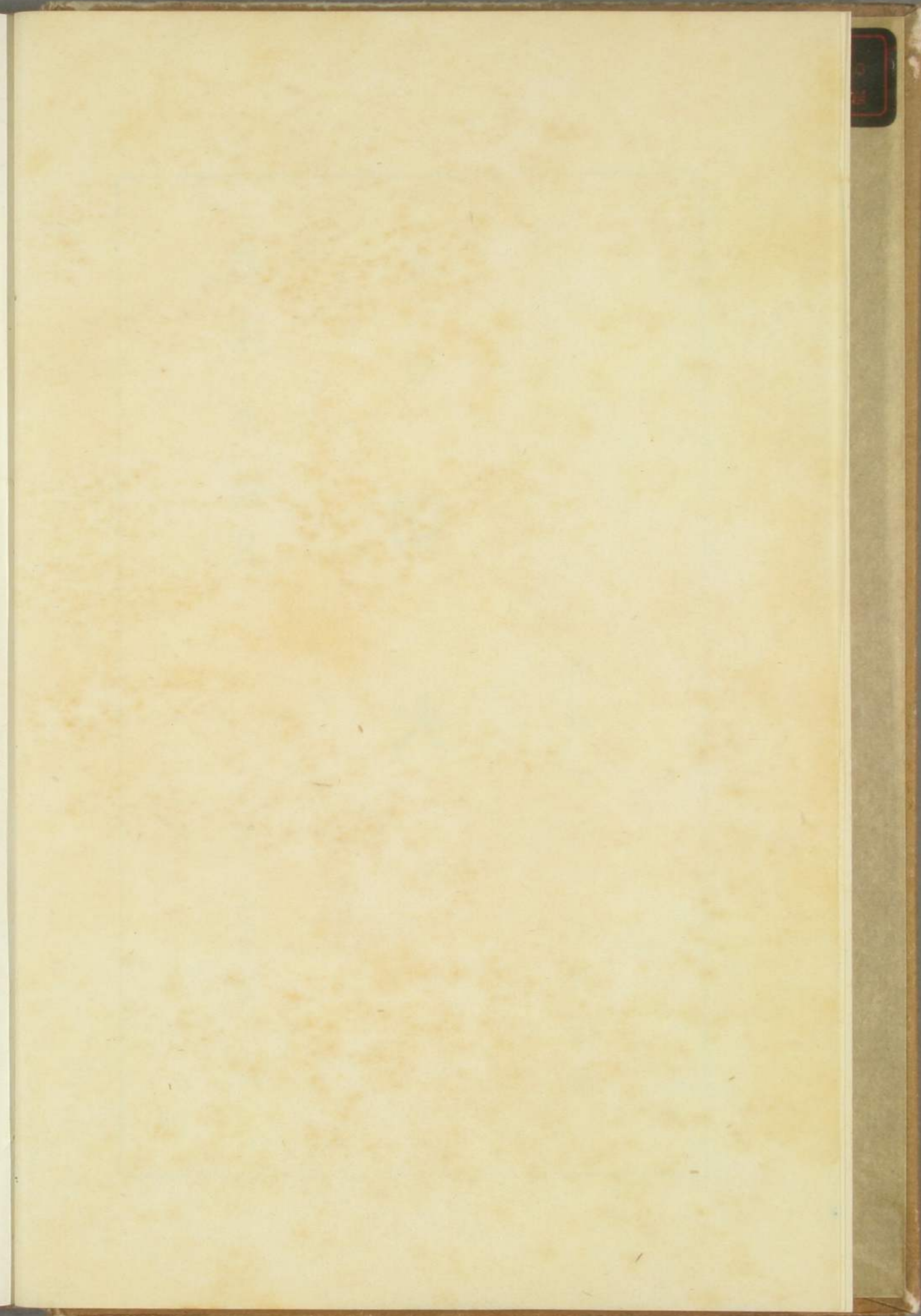
島木赤彦著

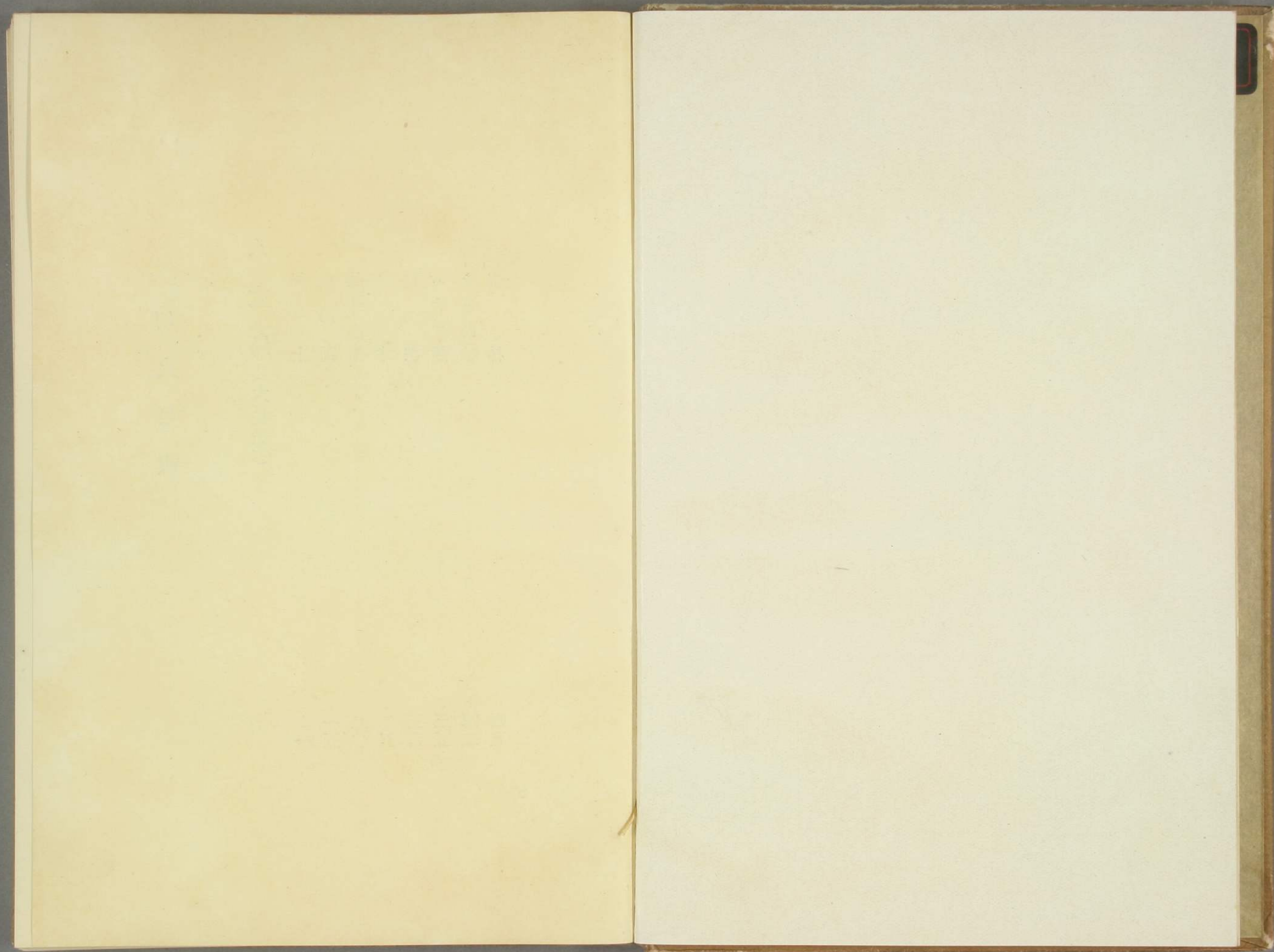
(アララギ叢書第四編)

歌集
切火

東京アララギ發行所







切火目次

八丈島 (大正三年)

船上	一
島の踊	一五
胡頹子の葉	二〇
椿の木	二五
島の芒	三〇
バナナ畑	三五
ある時は	四二
森林	四五

山の國 (大正二年)

諏訪湖	四七
八ヶ岳	五一
御牧ヶ原	五五
高木村	六一
雪の夜	六四
乾ける空氣	六六
陸奥の女	六九
流らふ色	七一
病院	七四
赤罌粟の花	八一
村會	八八

寒國の女……………九一
闇深く……………九四

國を出づる歌（大正三年）

家を出づ……………九七
輕井澤……………一〇二
路地……………一〇六
十年……………一〇七

街衢（大正三年）

山櫻……………一一三
くさめ……………一一六
稻毛の海……………一二一

歸省……………一二五
野に焚く火……………一三九
歌澤……………一四四
夕焼……………一四五
炭團……………一四八
霧鳥……………一五二

口繪 島の女……………平福百穂

三色版……………日能製版所

挿繪 如來……………平福百穂

八丈島 (大正三年)

船 上 其一

青海のもなかにゐつつ晝久し錦繪なら

べ見居りけるかも

天の原はるばる來つつ現うつかも海のいろ

深く黒き山二つ

みんなみに遠來こしならん海づく日黒潮

もはて山二つ見ゆ

日のひかり照りみつる海の深ふか蒼あをに一人

ぼつつり眼まなこをひらく

晝深し禿げしボーイの頭あたま動くデツキの

上の空は青しも

全くに諦め得たる歡びの涙ながるる青

海の中に

海の光いたも明るみ物をだに思はれな

くも我がなれるかも

天と水の光りのなかに立ちてゐる我が

影ばかり寂しきはなし

夕映空まつ平らなる海のいろに我も染

りて物をこそ思へ

かぎろひの夕さりくれば栖すに並び鶏とらの
つがひも船の上うへにあはれ

夕焼の空はあせぬれ深ぶかと波のうね
りの片光りすも

船 上 其二

ひそかにも止まれる船か霧きり小雨こさめをぐろ
く尖る島山の下に

ふかぶかと霧雨きりさめの中に船笛ふねばえのこだま響
かふ山近みかも

夜の錨下ろすとならし霧のなかに重き

鎖くわのなる響きはも

荒磯岩家あらいそいわはもいづこ曉の雨を目透まし我わ
が見つるかも

島の山霧はれくれば海にゐる心寂しく
ならんとするも

船 上 其四

船口ふなぐちゆまど小さき舟に下りにけり朝あけが
たの霧の流れに

まど下に小さき舟の來り居り霧のなか
には見えにけるかも

霧のなかの小さき舟にとび下りしうつ

そみの我が一人なりけり

船口ふなぐちゆ見ねばならねば降り落つる大粒
の霧に顔を出したり

霧雨にぬれたる肩を撫でにつつ小さき

舟に一人立ちしも

まことにも島に来つるか眼の前の山み

な揺れて近づく我が船

まさやかに曉あけの高岩かぐる岩波どよも
せり我が船近づく

荒磯あらいそ岩いは黒ぐると霧はれにけり冬の芒の
青みたる見ゆ

島の踊

堂庭に踊る島子をかぞふれば七人にんだま
り月の下びに

踊り子のをどる後うしろは椿の木かぐろみ光
り月の下びに

女ひと一人唄うたふなる島踊りをどりひそ
まり月の下びに

はるばるに波の遠音とほとのひびきくる木の
かげ深く月夜の踊り

黒ぐろと夜を濡れ光る椿の木いたも更
くるか月夜の踊り

富士に似て海の中なる島の富士眼の前
に黒く月夜の踊り

月の下の光さびしみ踊り子のからだく
るりとまはりけるかも

大海おほうみのまん中にして島なるや流人るじん踊り
は悲しきろかも

秋もはや今宵を踊りをさめなる後の月
夜の更けにけるかも

胡頹子の葉

荒磯^{あひそ}べの芒^{そう}の中に芒折り魚の鰓^{あぎと}を貫^ぬき
にけるかも

うろくづの鰓^{あぎと}にとほす冬芒未だも青く
とほしけるかも

磯芒舌にあつれば鹹^{しほ}はゆしここにさび
しく折りにけるかも

みんなみの海にすむなる赤き魚しつば
りと提げ日は沈むかも

夕づく日舟引きあぐる漁師らの足みな

傾き遠岩の上に

一びきの赤き魚を吾が提げて芒の中の
暮れ早みかも

寒ざむと夕波さわぐ海づたひ海は見え
ずも芒の中に

暮れぬれば芒の中に胡頹子の葉のほの

ぼの白し星の明りに

ほのかなる草の青みに夕星の夕るしづ

もる我がこころかも

椿の木

椿の蔭をんな音なく來りけり白き布團

を乾しにけるかも

はらはらと布團をすべる椿の花土にぞ
止まる晝は深けれ

眞白なる布團の上に只ひとつ椿の花の

こぼれて久しき

晝の音静もりぬれば椿の花障子の外に

零^{こぼ}るる聞ゆ

椿赤し島の童女^{どうにょ}が掌^ての上に卵をのせて
賣る面わはも

いとどしく椿の花の明るみに面わ近づ
き來る童女はも

冬の日短けれども椿の下白き布團の
ふくらめるかも

夜を寝れ布團の綿のふくらみに體うづ
まり物思ひもなし

命あれば海のなかなる島の家ふとん暖
かに寝らくものか

島の芒

船を出でし心現うつなし眞青なる芒の中に
入りにけるかも

まさやかに朝の雨やみし芒のなか道さ
へ青み踏みにけるかも

いとどしく青み静もる芒のなか一人ば
つつり行きとどまらず

芒の中いたも明るみ踏みて行く熔岩道
の堅くもあるか

いとどしく光のなかの青芒露いつばい
に落ちも零れず

青々し芒のなかに一ぴきの牛を追ひ越
しはろかなる道

島芒い行き寂しむ身一人のうしろに大
き海光り見ゆ

芒の島あが乗りて來し一つ船煙を吐き
て去るにかあるらし

芒のなか歩みとまれば綿津美の波の遠
音のさやけく聞ゆ

バナナ畑

夕ぐるる磯の明りゆ歩み入るバナナ畑
の葉の茂りはも

畑なかの土の一ひとところ夕日ありバナナ
の中に我れ深ふかからし

○

バナナの莖夕日に光り列びたり深ぶか
として葉かげは暗く

いとどしく夕日に光るバナナの葉深み
重かさなり未だは暮れず

バナナの莖垂り葉大きくたまさかに暗
きにひかる果の光りはも

葉上にはバナナの房の黄の光りいよよ
明るみいよよ暮るるも

夕ぐるるバナナの中に一ぼんのバナナ
を倒す音もこそすれ

バナナ畑土やはらかに島少女足あと深
く踏み行けるかも

バナナの莖やはらかければ音もなし鉦^{かね}
を打ちうち女なりけり

鳥の子の長き垂り髪うち仰ぎ見らく幽^{かそ}
けき果^みの光りはも

いちじるきバナナの莖の切り口ゆ水は
滴る土の暗みに

鳥の子は寂しけれども夕日さし黄の果
をふさに擔ぎけるかも

ある時は

バナナの皮剥きて投げたりさし出^での磯

岩黒きゆる波は青きか

日の光り明^からさまなる岩の上^まゆ見入ら

ざらめや波の青みを

高きより見下ろせば波の底も見ゆ大さ

岩沈み光り揺り見ゆ

夕日の岩眞黒けれども薊の花咲くところにはかたまり咲くも

薊咲く岩の上高み島の子の冷たき手を

ば引き上げしかも

森 林

常磐木の林のなかに家あらしある時は

兒の泣き聲きこゆ

椎森の眞晝の空の明るみに烟ひと一すち立
ちのぼり見ゆ

山の國（大正二年）

諏訪湖

夕焼空焦げきはまれる下にして氷らん
とする湖の静けさ

冬空の天あまの夕焼ゆきにひたりたる褐色かっしよくの湖うみ
は動かざりけり

たかだかと繭まゆの荷車にぐるまを押す人の足の光
りも氷こほりらんとする

押して行く繭まゆの荷車にぐるまは山の湖うみの夕照ゆふでりさ
むく片明かたあかりりせり

かわきたる草枯くさくいろの山やまあひに湖うみは氷
りて固まりにたり

この夕氷のいろに滲しみみたる空氣明りの
いちじろく見ゆ

おぼろおぼろ湖にくろめる山のいろも

崩れんとする夜の寒さはや

八ヶ岳

野は今は白雲の群れの片寄りに吹き寄

せられし夕光りかな

まばらなる冬木林ふゆきばやしにかんかんと響かん
とする青空のいろ

野の中に暮るる一つ家やいやましに風の
なかに静しずもれるかも

風の吹きしづまれば瀬の鳴りのいつこ
ともなし廣き野なかに

冬山ゆ流れ出でたるひとすぢの川光り
來きも夕日の野べに

かさかさと落葉林を通り抜けし夕明る
さをたどき知られず

あきらめねばならずと思ひ入りにつつ

唾を冷たく嚙みこめるかも

御牧が原

草深野丹にこもる莖のほのかだにさや
らんとする身はあはれなり

草むらの濃き紅くれないに我が影の消えてまた

來んいつの日かあらん

人に告ぐる悲しみならず秋草に息を白

じろと吐つきにけるかも

孤ひとりなる死にをもすらんと嘆きつつ鏘

び紅あかの草に胡座あぐらをなせり

草の藪はいや晝深く明るめれこの悲し

みを守る心かな

まがなしきこの心をも堪ふるか葉の紅
の明るみの中に

かへらんと今は嘆けれ青空に煙草ふか
して見やりけるかも

犬蓼のくれなるの莖はよわければ不便
に思ひ踏みにけるかも

いたましく天の火を吐く夜の山眼上に
あふぐ驛は暗し

遠どほに冬枯の道のぼり来て火の山の
下の驛うまやなりけり

山の宿やどに酒のみしかば夜は深し心あや
しくも笑はんとすも

高木村

褐色かつしよくの草枯の上にいささかの草屋根い
よよかわき光れり

冬枯の山田の畦うらの幾段に夕日ゆづりのかける
静歩みかも

冬木の坂あからさまにし傾けば氷の湖
ゆ照り返る明あかさ

敷藁わらに滲しみ出でし泥どろは夕づく日未いまだ明あか
けど氷りけるかも

氷ひの湖うみゆひた吹きあてるつつのり風日かぜを
明かあかと揺る障子しよかな

藁の上に並べて下駄の乾してあり小
さき赤緒も氷りたるかも

雪の夜

雪のふるひとつ草くさ家やに赤き灯がほうと
点つきぬる夕なりけり

木のなかの赤き灯つつむおぼろ雪いよ
よ静に降りつもるかも

乾ける空氣

いとどしく暮れかわきたる空氣のなか

芒は白く摧けんとすも

夕まぐれわが顔のへに芒の穂いたも白

める空氣のひびき

夕寒き芒がなかに入りてゆくおのが姿

の黝くもあるか

夕明りあまり明けあかば冬木のなか泣く子
をあやす思ひするかも

はるばると空に向ひてすぼめたる眉に

光引くひとつ星はも

陸奥の女

山驛さんえきの夜よるのひびきをしづめつつ笛鳴り
につつ遠去りにけり

停車場に錢をかぞふる老人の手の灯明
りに笛きこゆなり

みちのくへ逃げてゆくとふ少女子と話
なくなり笛きけるかも

流らふ色

青草原洋傘のなか深ぶかと沈みにほへ
る面わなりけり

日の明るき女の頬に青草のほへる色
はかなしかりしか

この青む草の廣原のかなしみをしじめ
集むる丹の頬なりけり

うれひある目見をりをりにあげぬれば
雲は眼ちかに青草の原

ゆゆしくも揺れ流らふ霧の流れ傘をか
たむけ雨にならんとす

霧のなかに明るみ徹る肌とほのいろの心静
けさに堪へられぬかも

病院

子の眼病に重大なる疑問を宣せられて直に東京に
伴ひぬ。夜一夜汽車に揺られて七月二十四日曉飯
田町に着けば直に車並べて病院に伴ふ。疲れを休
むるひまもなし。親心只恐れ急ぐに。

静もれる車上の姿 みづからの病を知
れる吾子あこが静もり

あが人力車くるま動きてあるを覺ゆれど眼またこの
前の子をこそ守れ

ふと我にかへるわが身は暑ければ流る
る汗を拭かんとすなり

薬さす眼をおさへつつ眠るまでに疲れ
て遠く來らしめしか

看護婦のみちびきのぼる楷子段淨く寂
しく拭かれてありけり

親心おろおろするも座りゐて額の汗を
拭きてやれども

空瓶あきびんに煙草のほくそ拂ひたる心あやし
く笑へざりけり

どよもせる都會とくわいの中にたまさかに廊下
を通る足音きこゆ

廣らなる街の夕焼屋根ちかくいや焼け
さかり寂しくもあるか

親と子と寂しきときは蚊帳ぬちに枕並
べて寝て語り居り

この父の顔見ゆるかとむごきこと問ふ
と思ひて問ひにけるかも

父はけふ國にかへると聞きわけし幼き
顔を見てやりにけり

赤罌粟の花

組の魚いきいきと眼をあけり暮れ蒼み
たる梅雨の厨に

うつくしき血しほを指に染めにつつ生
きものの命さきて我れ居り

小さな魚の命の断たるればうつくし

き血は流れながれぬ

赤き血しほ地に垂れてあはれ炎々と燃

えあがる青き莖の上の花

蒼やかに暮れただよへる土なれば花は

こぼれて沈むが如し

夕^{ゆふ}ほろほろ赤罌粟の花はこぼるれば死
なせし魚に念佛まうす

わが眼^{まなこ}の力あはれに疲るれば涙こぼる
る器械の如くに

さ蠅らと寄りあひて住める六疊の空氣
にたまる夕日の赤さ

わが家にこのころ火をも焚かされば一
人物を書き夕ぐれにけり

夕まぐれ音をひそめて歸り來し子ども

は雨に濡れてをるかも

夜おそく水を貫ひに行く道は桑の葉青

く灯を提ぐるなり

薪まきくべて火をふくおのが唇に涙流るる

拭けども拭けども

静やかに雲行きぬれば圓まるらなる青桑の

丘の動く思ひすも

村會

夜を深くいよよ黙もせる村會の庭は落葉
の吹かるる音す

何本なんぼん目の蠟燭ろうそくならん霜の夜の蠟ろうをとろ
とろ流しけるかも

學校を建てねばならぬしんぱいの顔こ
そ並べ蠟燭の明り

冬山の萱かやことごとく賣るといふ百姓の

心あはれなりけり

幾夜さの集ひのはてにおほろなる百姓

の眼のねむらんとする

寒國の女學校

ポプラーの冬木の窓はしんとして光り

静しづめり女子にょしらこもりて

きよらかに拭はれにける板上ぼくじょうに女の稚わか
足の光り動きし

丘の下市街の屋根は雪降れば晝ひひそや
かに歌ひ終りぬ

丘の雪はだらに今は晴れたればはゆげ
にしつつ見る眼かな

闇深く入りきはまれり今生こんじやうに口外をせ
ぬこの心かな

眼のかぎり冷えつくしたる娑婆の道に
人ぼろぼろと別れ行くかなし

ほろほろと遠き曇りのうす明りうすろ
ひにつつをはりなりけり

ほのかなる曇りをゆくはおぼつかな我
が足おもく崩くづゆる思ひを



① 佛石

國を出る歌 (大正三年)

家を出づ

妻も我も生きの心の疲れはてて朝げの
床に眼ざめけるかも

かうしつつ膝ならべつつある心曉のひ
かり時すぎんとす

古家の土間のにほひにわが妻の顔を振
りかへり出でにけるかも

日の下に妻が立つとき咽^の喉^ど長く家のく
だかけは鳴きゐたりけり

幼な子は病みのよわりを立ち出でて吾^お
を見たるかな朝日のなかに

三人の子だまりてあとにつき来る湖うみの
朝あけは明るぐるしも

幼な手に赤き錢ぜにひとつやりたるはすべ
なかりける我が心かも

この朝げ道のくぼみに光りたる春への
霜を踏みて別れし

灰の上に涙落してゐし面わとほどほに
来て思ほゆらくに

輕井澤に宿る。四月十一日といふに

草木皆冬枯のさまなり。

雪のこる土のくぼみの一^{ひと}ところここを

通りてなほ遠^{とほ}ゆくか

今は世ははろかなるかなと雪どけの水

たまりへにかへり見にけり

雪とけて遠あらはなる地の平らさむく

小さく日は没^いらんとす

國境くにざかひとほのぼり來こし野の上のうへにほかり白
きは辛夷くぶいの花か

日くるれば冬木の條すぢのほろほろに壞これ
んとするわが心はや

家かげは霜凝る土のかたまりに嵐吹き
つり明るかりつも

風こがらしの宿やどに屏風を立てまはし灯を明くし
ていかにかはせん

路地

思ひかね路地ろちを入り來れ雪どけの泥は

おどろに明るかりつも

十年

霄ふくる土のけはひに櫻ふり其所そこに車

を行かせけるかも

ひそかなる幌のすきまは店の灯にちら

ちらと花のちりしく光

かうなれる心は今堪へられね車はす

べる夜ぶかき土を

更けぬれば窓の外への櫻の灯ほのか
にさしてうき面わはや

ぬば玉の夜は一時を過ぎたらん櫻の庭
に拍子木ひびく

十年の行くへ思へば南無大悲現し命いのちを
死なしむなゆめ

お互によわきからだは十年のながき命
を信ぜんとすも

晝ふかき櫻ぐもりにするすると青き羽
織をぬぎし子らはも

落葉か松まつの萌黄の芽ぶきけぶりつつ日は
たけなはとなりなにけるかも

口^{にが}き煙草を折りてすてにける木^きの下^{した}
の土に又も來めやも

やうやうに起きあがり得し汝^ながからだ
撓^しぬのつかれを歸らしむるか

街 衢 (大正三年)

山
櫻

寂しさよ山ざくら散る晝にして五目な
らべをすると告げ來し

松の木に櫻流らひ小^こ半^{はん}日^{にち}五目ならべを
すると告げ來し

書^ほ物^んさげて戻り來ればさくら散る山中
のはがき届きてゐたり

峽^{かひ}底^{そこ}の春は寂しく残るとふ櫻のかけに
女なりけり

白雲の山のおくがにはしけやし春の蠶^こ
飼ふと少^せ女^{とめ}なりけり

噴
嚏

梅^つ雨^か眞^ま晝^{ひる}鼻^びのそこひのむづ痒^{かゆ}し嚏^{くさま}をせ

んと口^{くち}洞^{うら}あくも

くさめするわが顔の前は雨の雫^{しずく}硝^{しょう}子の

窓^{まど}に流れつつをり

せんすべを知らなき時は口あきてつぎ

の嚏^{くさま}を待つまん眞^ま晝^{ひる}

まんまひる梅雨つゆに倦つみたる心もて大き

くさめをしたりけるかも

五月雨にぬれ來きし女をひそまりて見入ら

さらめや晝の鏡に

硝子戸に雨流るれば庭の青のおぼろに

透きて眞晝なりけり

雨だれの音いや深しあが口を鏡のなか

に噤しめてさびしも

梅雨^{つゆ}ふかき下宿となりぬわが顔を鏡の
中に見つつわが居り

先生の死畫像の軸をはづさんと思ふ五

月雨の久しかりけり

稻毛の海

梅雨^{つゆ}明^{あか}り松の木の間の深うして雀のつ
るむ愛^{かな}しかりけり

五月雨は晴れんとすらし百姓の頭あたまの上
に雲は赤かり

夕焼の空の下びにつかれたるわが口こう中ちゆう
は苦にがみを覺ゆ

五月雨の雲高くあがる海に向きて丘は
暮れなびき遠とほ楮あひのいろ

かきくらし五月雨るる丘のひた落ちに
げそりと落ちて黒き海かも

おもおもしろく濡めりみちたる霧のこも
り波ほのくらく或ひは光り

霧のなか光り浮き來る屋根の上に梅雨
の海の時明り見ゆ

雨あがり揺るる霧のひとところ白き帆し
るく光りて動く

ゆゆしくも神鳴らんとする空氣のいる

燕つばくらちちと舞ひひそみたり

日はたけなは黄にからびたる豆の葉に

ぴかりと揺るる遠稻とほいな光びかり

青葉の窓あやに明るみ削り氷ゆ白き蒸

氣たつ晝深みかも

起き出でて蚊帳ぬちの蚊を焼きにけり
蠟燭の火を持つ夜は深し

蚊をやくと夜をふかく持つ灯の下は腹
もあらはに我が子のねむり

子どもらの寝顔並べり黄色くわうしやくの火をうご
かして蚊の翅追ふも

燈ひの下にそろばん持てる妻の顔こらへ
られねば寝なとこそいへ

寝られねば水甕みづがらにゆきて飲みにけりあ
な冷たよと夜半よなにいひつる

水甕みづがらの蓋誰れか忘れて灯の下したにすなは
ち光る夜の水はや

蚊のうなり水甕ふかく籠りたり柄杓を
水に沈むるころ

親子とも生まれこしものか夜の灯ふけこ
やり寝かへり汝が顔見るも

歸省 其三

桑の葉の茂りをわけて來りけり古井の
底に水は光れり

昔見て今もこもらふ齒朶しだの葉の暗がり
ふかく釣瓶つるべを吊るも

雲とほくまたも行きなん桑の葉のしげ
みにこもりこの水を飲む

朝あけの桑の葉青みかがやけり盥のな
かに水を動かす

あが側そばに子は立てりけり顔洗ふ間まをだ
に父を珍らしがるか

歸省 其四

日焼け瓜いくつも下がり明るめり夕焼
畠に我も明るき

いとどしく夕焼畑のまんなかに熱き胡
瓜を握りたるかも

桑畑の桑價は立たず三右衛門泣くかは
り唄をうたひけるかも

歸省 其五

芒の穂白き水噴くと見るまでに夕日に
光り並びたるかも

紅くれないの芒の穂並くもり日の静かさふかく
動く時かも

朝づく日谿とほ埋む青葉の群れひえび

えと動き白しろみを覺ゆ

野に焚く火

火の上に投げかさねたる草くづれ烟きい黄
ろく渦まき光る

草深く燃えあがりたる火の炎ほのほ黒ぐろと
して噴きにけるかも

黒ぐろと噴ける炎に夏深けの草は大き
く揺ゆれたりけり

何草の焼くるにやあらんあからひく日
は明あうして匂ひ滲しみ來も

夏の草い分けおしわけ立ちのぼる炎の
上に太陽が照る

太陽ぞ炎のうへに堪へにける炎の上に

揺るる太陽

何といふ今のころぞ炎のそこの紅ゆ

すり目は側らされず

炎はも物をやかねばあらねば白き花

びらを眼の前にやく

夏草の茂りを深くくぐりたる黄ろき烟

立ちまよひ居り

歌
澤

歌澤の唄は落ちゆく夜の静み枕はづし
て寝る女が思ほゆ

夜の燭いたも更くれば歌澤の絃は芒に
ならんとするも

夕
焼

稻のなかにふかぶかと立つ百姓の顔に
照りかへり夕やけの空

夕焼くる雲もあらねば高天の奥所明る
く黄に澄めるかも

夕焼の青草ふかく眞鍮の烟管を石には
たきけるかも

伏しなびくみだれ青葦白き帆を一ぱい
に張り夕焼の水

夕やけの光の街は瓦斯の灯の青くあや
しく満ちゆかんとす

炭 團

148

野分の葉散亂し日は射しにけり女ひそ
まりて炭團をまろむ

149

野分すぎ裸のをんな赤あかと腰に布せ
り炭團を持ちて

葉が散れば葉の上うへにたどん丸めけり嵐
やみて女ひとり來りし

女をんな手に炭團すすだままるむる晝久し散りたまり
たり鳳仙花ひばなのはな

鳳仙花ひばなくれなる零こぼれこぼるれど炭團すすだまま
ろめて餘念あまのりなし女

衢風ちまたかぜはや秋ならしぬば玉の夜の目にし
るく雲流れ見ゆ

行く雲はささやかなれど切れぎれに都
の夜を流れ居る見ゆ

小石川富坂上の木ぬれにはここだも通
る夜の雲かも

一人して茶をのみ馴るるおのが身を寂
しくぞ思ふ夕すわりゐて

小夜ふけて聞ゆるものは遠街とほまちの電車も
やみて雨ふるけはひ

硝子窓がらすに夜の雨流れりたりけり寝んと

思おもひつつ寂しくもあるか

大正四年三月二十二日印刷
大正四年三月二十五日發行

定價金八十錢

(郵税八錢)

著作兼
發行者

東京市小石川區白山御殿町百二十七番地
久保田俊彦

印刷者

東京市芝區愛宕町三丁目二番地
見常喜一

製本者

東京市日本橋區本銀町一丁目九番地
寺島藤次郎
電話本局五一七二番

發行所

東京市小石川區
白山御殿町百二十七番地

アララギ發行所

發賣所

東京市神田區
南神保町十六番地

岩波書店

電話本局五四二〇番
振替東京二六二四〇番

(3)

